

書 評・紹 介

福本 拓 著

『大阪のエスニック・バイタリティ 近現代・在日朝鮮人の社会地理』

京都大学学術出版会, 2022年3月, 224ページ

大変な熱量を持つ本だ。読後、まっさきに私の頭に思い浮かんだのはこの言葉だった。文章自体はむしろ淡々としており、分析結果を基に冷静な記述をしているのであるが、多彩な一次資料の分析結果である数字の隙間（文章ならば“行間”なのだが、数字の場合には適切な言葉がないため、ここではこのように表現しておく）からは、人々の思いや時代のエネルギー、そして著者の熱意が伝わってくるのである。

本書は、大阪における在日朝鮮人の集住地区について、その過去約100年にわたる空間的形態の歴史の変遷を、主にそこに居住する人々の就業と居住という視点から質的／量的に分析した学術書である。ちなみに、タイトルにある「エスニック・バイタリティ」という言葉は著者の造語である。エスニック集団が居住し、エスニック・ネットワークを活用しながら経済活動が行われる場は「都市という生命にとって不可欠 (vital) な性質を有する」「多様性を胎胚する空間」(p.6)であり、それが持つ多様性と常なる変化が都市の魅力となり、都市を発展させる、というのが、本書に通底する著者のまなざしである。

評者が考える本書の魅力については後に述べるとして、まずは本書の構成と概要についてまとめよう。本書は第I章～第IX章で構成されている。第I章・第II章では研究の視点、課題、意義等が丁寧に述べられている。第III章では国勢調査小地域データを用いた東京と大阪の集住傾向の比較、第IV章以降は大阪を対象とした詳細な地域分析で、1920～50年代（第IV章）、1950～80年代（第V章）、1980年代以降（第VI章）の大きく3つの時代に分けて、「在日韓人名録」や「大阪府警察統計書」、土地の登記簿などの一次資料のほか、国勢調査や住宅地図なども用いながら、集住地区の人々の居住、就業状態、不動産取引の状況などを明らかにし、社会的差別も強かった当時の厳しい社会経済的状况を背景とした在日朝鮮人のエスニック経済の特性と集住傾向の変化を論じている。第VII章では、バブル期以降の花街の衰退とそれに代わる韓国クラブ街の形成について、土地登記簿や関係者に対する聞き取り調査などから、金融資本の土地への転化プロセスとオールドカマーとニューカマーのつながりを鮮やかに描き出す。第VIII章では、2000年代以降の韓流ブームを背景とした文化消費的側面からコリアタウンの観光客という新たなアクターに焦点を当て、多文化共生や異文化交流などの社会的価値の向上に向けた将来の課題について論じる。第IX章はまとめの章であり、前章までの内容を振り返るとともに、デヴィッド・ハーヴェイによる資本の空間的回避という概念を用いて、在日朝鮮人の空間的集中の存続を説明し、未来を展望する内容となっている。

本書の最も大きな特徴としては、多彩なデータを用い、多様な分析を行っていることである。先述したもののほか、「在大阪朝鮮人各種事業者名簿録」「在日韓国人企業名鑑」「在日韓国人会社名鑑」「大阪府下新地組合組合員名簿」などの資料に加え、地域の関係者、不動産業者、来街者などに対して聞き取り調査を行い、独自データに基づく質的分析と量的分析を行き来しながら、考察を深めていく。量的な分析手法としては、集中度合を空間的な関係から把握できる General Spatial Segregation index (GD 係数)や空間的自己相関を評価できるローカル・モラン統計量、期待される

平均距離に対する観測された平均距離の比率である最近隣測度などの空間分析の手法だけでなく、オッズ比や特化係数といった様々な分野で用いられる汎用性の高い指標など多様な手法を駆使しており、大変興味深い。

評者が感じた本書の最も大きな魅力は、量的分析であっても、そこから浮かび上がってくる当時の人々の生活実態が真に迫って感じられることである。なぜ、本書はこんなにある種の迫力と熱量を持つのか、それはおそらく、著者は集住地区を都市の本質に結びつく2つの側面、すなわち「(空間的な)広がりとしての都市」「交わり(人・モノ・資本の流動ネットワークの結節点)としての都市」の双方に関わる空間であると捉えており、どのような分析結果の解釈においても、この2つの視点が常に意識されているからだと思う。空間には常に人の活動があり、そして人の活動が空間を変容させていく。著者の柔軟で俯瞰的な都市に対する視点が、ともすれば機械的になりがちな分析結果の記述に命を吹き込むことにつながっており、それが総体的な本書の魅力になっている。

最後に、本書でもう少し取り上げて欲しかった点について2つ触れておきたい。一つ目は「世代」という視点である。終戦後まもなく定住を開始し事業を始めたオールドカマーの一世は、おそらく1910～20年代に生まれた世代であろう。すると彼らの子世代、すなわち二世の多くは1940年代後半生まれの団塊の世代、そして三世は1970年代半ばの団塊ジュニア世代が多いと想定される。日本における1970年代は急激に大学進学率が上昇しただけでなく、恋愛結婚の割合が見合い結婚を大きく上回るようになっていたり、合計特殊出生率が人口置換水準を下回るようになっていたり、病院での死亡数が自宅のそれを上回るようになっていたりするなど、ライフスタイルや社会全体の価値観が大きく変化した時代である。このような時代の変化の中で、二世は自らのアイデンティティをどう考え、家業の継承や居住地選択、そして帰化といった重大な決断をしていくようになったのだろうか。「世代」という視点を入れることによって、分析はさらに深みと迫力を増すだろう。

二つ目は、観光地化したエスニック空間における資本と空間変容の相互関係に対するさらなる分析である。第Ⅷ章はそれまでの分析と比較するとやや迫力に欠けた。観光地化したエスニック空間では不動産所有者たるオールドカマー、店舗事業者たるニューカマー、さらにはそこで出稼ぎ的に働く一時的な滞在者がおり、エスニック空間における活動形態や関与の仕方は様々であろう。そうした多様な主体によるエスニック資本の蓄積が、今後、空間変容にどのような影響を及ぼしていくのかという点についての分析や展望がもう少し欲しかった。

評者は常日頃、統計データの分析にあたっては「数字の奥には現実世界がある」ことを肝に銘じている。1人の誕生や死は単なる「出生数1」「死亡数1」ではなく、様々な人々の関わりや感情がある。本書はまさにそのことの大切さを再認識させてくれると同時に、研究の奥深さ、面白さも改めて教えてくれた力作である。都市社会地理学や経済地理学に関心がある研究者だけでなく、都市の多様性や地域共生社会に関心があるまちづくり関係者や自治体職員にも本書を強くお勧めしたい。なぜ活力あるエスニックタウンでは行政の関与が大きくないのか、そして多様性とは何かについても深く考えさせられるだろう。

(藤井 多希子)